

心の壁かあちゃんは闘う

高齢者や外国人、障害者、ひとり親家庭、性的少数者などに立ちほかる社会の様々なバリアー（障壁）を打ち破る陽気なかあちゃんを描いた映画を、愛知県東浦町の市民団体が作った。「寛容性や多様性など、違いを認め合うことの大切さ」がテーマだ。24日に町内で、初の上映会を開く。



映画「バリアフリーかあちゃん!!」の一場面。主人公の朝子を演じるこじまけいこさん＝ひがしうら映画プロジェクト提供

高齡者・外国人…認め合う 映画 町民ら200人出演

愛知・東浦

映画は「バリアフリーかあちゃん!!」で、「ひがしうら映画プロジェクト」が制作した。代表で日本福祉大職員の村松愛子さん（48）がプロデューサー、愛知淑徳大非常勤講師で映画制作による地域づくりを研究する石丸みどりさん（59）が監督・脚本を担当した。石丸ゼミの学生9人も、スタッフや出演者で参加した。主人公の朝子は、夫と小



（右から）プロデューサーの村松愛子さん、監督・脚本の石丸みどりさん、石丸ゼミの石田葉さん、打田雅仁さん＝愛知県東海市

学生の男の子との3人暮らし。アイドルのコンサートで立ち往生する高齢者に心ない言葉を浴びせる若者に声をかけたり、言葉が通じずに買い物に困る外国人を身ぶり手ぶりで通訳したりして、「バリアフリーかあちゃん」と呼ばれている。だが、自らも人には言えない「心のバリアー」があった。朝子自身がバリアーを越えられるか——という内容だ。

石丸さんは、岐阜県恵那市や愛知県高浜市などで地域映画の制作に携わった。「社会のバリアーや自分自身のバリアーを乗り越えていく映画。子どもたちのために、すべてを受け入れる母の姿も描いた」。自らもひとり親として2人の子を育てた経験があり、「映画を見た人に、いろんな問題に気付いてほしい」。東浦町出身の村松さんは「町の人たちはおおらかで、外国人にも住みやすいと言ってもらえる。町を舞台に、寛容性や多様性がテーマの映画で全国発信したい」と話す。

映画には町民ら約200人が出演。障害がある人たちも多く参加し、昨夏に撮影された。オーディションでは、ひきこもりだったという30代の女性が「（映画で）自分も変われるかも知れない」と応募の理由を説明。石丸さんは「その言葉がすごくうれしかった」という。

石丸ゼミ生で愛知淑徳大3年の打田雅仁さん（21）は、日本語が分からない日系ブラジル人役で出演。「エキストラのブラジル人にポルトガル語を教えるもらいながらの撮影だった」。父親はドイツ人で、外国人の受け入れは身近なテーマだ。

映画は43分。YouTubeで予告編を見られる。初の上映会は24日午後6時半から、東浦町石浜の町文化センターで。入場無料。問い合わせは、ひがしうら映画プロジェクト（nigashitura.eiga2017@gmail.com）へ。（豊平 森）

2019年2月20日 朝日新聞朝刊より

この記事は朝日新聞社の承諾を得て、掲載しています。